平成15年度 第3回石狩市男女共同参画推進委員会

平成16年3月15日

午後3時00分

石狩市役所201会議室

出席者 榎本委員、木村副委員長、桜庭委員長、大橋委員、紙谷委員、中村委員、平井委員、
松下委員、高谷委員、永谷委員、三崎委員、三浦委員

欠席者 浅野委員、木本委員、村上委員

事務局 野企画財政部長、桑島男女共同参画担当参事、川村男女共同参画担当

傍聴者 0名

議 題 1. 開会

2. 委員長挨拶

3. 報告・協議事項

平成15年度男女共同参画推進事業報告について

平成16年度男女共同参画推進事業計画(案)について

「教育における男女平等の意識づくり」モデル授業の取りまとめと今後について

「プラン21」の見直しについて

その他

4. その他

5. 閉会

1. 開 会

桑 島：それでは、お時間になりましたので、早速始めさせていただきたいと思います。

ようやく春みたいになってきましたけれども、平成15年度最終回の3回目になりますので、どうぞ本日もよろしく願いいたします。

では、委員長お願いします。

2. 委員長挨拶

桜 庭：皆さんこんにちは。春になったかなと思うと寒いということで、春が待ち遠しいですね。

3. 報告・協議事項

桜 庭：早速平成15年度の第3回、本年度、15年度としては終わりの委員会ですけれども、始めさせていただきます。

それでは、まず本日の議題なのですけれども、皆様のお手元にもう資料が配られていると思いますけれども、今日は初めに平成15年度の男女共同参画推進事業の報告、それと4月以降の平成16年度、これの事業計画の(案)でございますけれども、この二つ、これをまとめて事務局さんの方から報告、それから説明両方していただきたいと思います。

では、事務局さん、お願いいたします。

川 村：川村です。お疲れさまです。

まず、今日の配付資料を確認させていただきます。今日のレジュメ、皆様に送付していたのですが、

一部変更とあと中に追加資料していますので、改訂版の方を今日はお使いください。それと教育における男女平等モデル事業の報告書。このような絵の入ったものがあるかと思います。あとは「男女共同参画推進本部ニュース」と、石狩市の商工労働観光課で出しています「石狩市労働実態調査・家族労働者労働実態調査」も皆さんにお配りしています。あと北海道の「男女平等参画マガジンともろう」、こちら28日のセミナーに来られた方にはもうお渡ししているので配っていないのですが、こちらの方どうぞお読みください。あと最後に市民図書館の所蔵リストということで、こちら横版になっています。ありますでしょうか。

(はいの声)

川村：そうしましたら、平成15年度の報告からいたします。こちらのレジュメの方、2ページから、まず先ほど言いました、市民図書館の蔵書リストを作成いたしました。広報2月号の特集でも男女共同参画の特集を組んだ際にも一部お載せしています。ぜひ今後の活動等にご活用ください。

続きまして、3ページです。これから終了する事業なのですが、男女共同参画自主研修事業ということで、研修参加者葛西庸三さん、3月10日から13日まで石川県に研修に行かれました。まだ報告はこれからですので、次回のときにご報告いたします。

それから、その下の女性相談が今週の18日をもって、今年度の相談日は終了いたします。現在のところ12回開催し、うち10件の相談件数となっています。

続きまして、平成16年度の男女共同参画の事業(案)です。4ページからとなっています。まず「男女共同参画フェスタ in いしかり」、第1回の委員会でも了承いただきましたとおり、日程を国に合わせて23日から29日まで、こちらに三つ上げているのですけれども、テーマを「おんなの言い分・おとこの本音」ということで、6月26日土曜日rinkurを予定しています。

今回、今まで男女共同参画コンテストを開催してきたのですが、平成12年に中学生以上の標語を募集して、平成13年からは写真コンテストということで写真を撮っていただいていたのですけれども、より多くの人にこのコンテストに参加してもらおうということで、6ページをごらんください。

「あなたへのはがき」作品募集、身近なパートナーにメッセージをつづってみましょうということで、このパートナーというのは妻であったり夫であったり、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、上司とかいろいろあるかと思うのですけれども、こちらに上げている三つの部門、川柳・俳句・短歌部門と絵手紙部門、おたより・メッセージ部門の三つに分けて募集したいと思います。

例えば、石狩絵めーるの会の絵手紙の代表の方に今こういうふうに書いていただいたのですが、これは男の人と女の人が手を支え合って一言、「男と女、支え合って」とあるのですけれども、こういったものをイメージして、言葉でも、ふだんのちょっとした思いをつづってくださいということで募集したいと思います。

表彰ですが、最優秀作品に関しましては、これから作成いたします女性相談のリーフレットですとか、今回プランの見直しがあるのですけれども、その改訂版の表紙とかに使いますということで、これからの普及、啓発に使っていこうと思います。こちら集まりました作品に関しましては、推進週間の間、図書館等で展示をするなど、広報4月号で皆様にお知らせする予定です。

4ページに戻りまして、三つ目の女性のための専門相談ということで、女性相談の拡大の一つとして、法律(弁護士)相談、あとDV相談、子育て相談の3ブースを予定しています。フェスタを皮切りに今度セミナーも開催していくわけですけれども、その下の一応三つをテーマに6月、7月、11月を予定してまして、一つ目は父親の子育て、二つ目がDV、三つ目が国際交流と、フェスタを皮

切りに順々にセミナーを開催していく予定でいます。

これらのフェスタ、セミナーに来年度からは「市民からのアイデアをください」と3月の広報でごらんになった方もいるかと思うのですけれども、7ページ、「男女共同参画ボランティアスタッフ募集」ということで、過去にエンパワーメント事業、研修に参加した方や、フェスタ、セミナーに参加した方、もちろんこの1期、2期の男女共同参画の推進委員の皆様もそうなのですけれども、事業の企画段階から参加して、それぞれの活動分野を生かして、幅広いネットワークづくりを目指すものです。具体的には企画をいただいたり、イベントの準備、運営など、男女共同参画の推進役になっていただくスタッフを募集する。登録制ということで、説明会を4月の中旬にりんくるで開催する予定でいます。この中で平成16年度の事業を説明して、皆様の得意分野を登録して書いてもらうということをちょっと想定しています。

また、次に5ページの方に戻りまして、一番上のエンパワーメント事業、自主研修事業、来年度は2名の予算措置となっています。その下の女性相談のところに、先ほどから女性相談事業の拡大、推進週間で専門相談を設けるということに加えまして、こどもセンター相談員との連携ということで、今、こども相談センターは平日の9時から5時まで相談員の方がいらっしゃるのですが、そちらと連携する。今女性相談は毎月第3木曜日に開催しているのですが、加えてこちらの方で1階の相談コーナーとする分は、6月から11月までの期間は最終火曜日に設けるということで、実質1.5倍、6回増やしました。加えてこどもセンターとも連携いたしまして、土日祝日以外毎日相談に乗ってもらえる体制をつくっています。

こうした庁内の相談機関に加えまして、道の相談機関、DVだとか、セクハラだとか、ストーカーだとか、いろいろこのようなパンフレットあるのですけれども、こういったものを一つにまとめた専門機関の相談パンフレットというものを作成して、より充実を図っていく予定であります。

実際には1階の女性相談のところに5部ずつこれ置いているのですよね。そうしたら今現在で、1月からなのですけれども、DVが4件、セクハラが2件で、ストーカーが1件なくなっている状況で、皆さん取っていかれているという状況です。

それから、一番下の行政推進会議、こちらも後ほどご説明いたしますが、プラン21の見直しを行うということで、来年度開催する予定であります。

以上、駆け足だったのですけれども、今年度と来年度の事業の報告いたします。

桜庭：はい、ありがとうございます。

とてもスピーディーな説明でございますので、15年度の事業、さらに16年度の事業計画、それぞれ内容をご説明いただきましたが、ちょっとここお聞きしたいなという質問ございませんでしょうか。とてもスピーディーで要領、ポイントだけ、ぼんぼんぼんご説明でするので、せっかくの機会ですから、どうぞお確かめいただくなり、ここは何だったのでしょうかという疑問などございましたら、出していただきたいと思えます。

何も皆さんからのお声がないようなので、私が口火を切りまして、事務局さん、15年度の実績で女性相談が10件というふうにご説明いただいたのはどんな中身だったか、大ざっぱでよろしいですけど、教えていただけますか。

川村：10件中6件がDV、離婚とDVがちょっと絡んでいるのであれなのですけれども、離婚も4件ですね。そのほか老後の生活の不安。あとストーカーですね。

桜庭：ストーカーもあるのですか。

川 村：すみません、相談日以外の内容も含んでいます。

桜 庭：ありがとうございました。

いかがですか。何かございませんでしょうか。

高 谷：今の女性相談の10件来た方なのですけれども、広報でこういう相談窓口あるというふう
にわかって来ているのか、それともだれかに相談して、その方のアドバイスでこういうところがある
から行って見たらということ、相談窓口にいっちゃっているのか、ちょっとそこら辺を、相談す
るきっかけをどういう形でなっているのか、ちょっとお聞きしたいのですが。

桜 庭：それは把握されていますか。

川 村：具体的に相談に来た方に、何を知って来られたのですかということは聞いていないのです
けれども、大体広報を見たとか、あと電話でよく相談はいつやっていますかという問い合わせもあり
ます。

桜 庭：きっかけは余り明確にはとらえていらっしやらないようですけれども。

高 谷：広報に載っていることが効率がよくて市民の目に触れているのか、それとも口コミがあっ
て、あるいはまた前年度とか1回でも相談した方が経験上、アドバイスしてくれて、あそこ行ったら
よかったよみたいなことがあったのかなとかと思ひましてね。やっぱりPRも大事かなと思うので
よね。せっかくこういう大切なすてきなすばらしい窓口持っていて、市民が知らなければやっぱり
相談したいときにどこへ行ったらいいのだろうという戸惑いがたくさんあるような気がするのですよ
ね。

桜 庭：確かに、相談窓口がおありなんだから、ちょっと小さな不安でもご相談なされた方が問題
解決には少し近づけるということ、いいことなのですけれども、ちょっと利用件数が残念ながら少ない
ような気もいたします。

桑 島：ちなみに、平成13年度が8件、14年度が4件、15年度がこれまでに10件というこ
とですので、PRのところで云々ということではちょっとないような気がいたします。

それと、広報には毎月一定の相談窓口のところに載せていますけれども、そのほかに毎月ポスター
でもって、あいボードでご案内しているというようなこと。それからただ相談員の方に必ず何で今回
相談に見えましたかということをお願いしていただくようにはお願いしていないので、といいますのは、
いろいろ相談の中身も非常に緊急性を帯びた場合もありますので、それはちょっと今のところは難し
いかなというふうに考えています。

松 下：プライバシーなのですね。

桑 島：そう、プライバシーの問題もあるので。

松 下：多分、広報が一番効くのだろうと思うのです。なかなか相談するというとどうしても。だ
ら広報が一番有効にね。

桜 庭：お茶の間に届きますから、広報はね。というように、私の質問のようなご質問を委員の皆
様からもどうぞお願いを申し上げます。

中 村：DVとかストーカーになりますと、最終的には行政の対応というよりも、もっと警察の部
分にもそういったアドバイスをされているのかどうか。

桜 庭：お巡りさんの方にもご相談に乗っていただくから、実際は例えばストーカーとかDVはお
巡りさんの方にも相談はあるみたいですね。それはあると思います。

松 下：ですから、むしろこっちに来ないで、真っすぐそっちへ行っている可能性もある。犯罪行

為ですからね。ですから多分これ以外にそういうのがあるのかもしれないね。

桑 島：実は、相談センター、道がやっていますので、そちらの方とも連携とれるようになっていまして、年1回ぐらいの資料はいただいていますので、全然私どもがわからないところでもって、直接行かれているケースもあるように聞いています。

それと、今のところたまたまですけれども、相談日その日においでになったDVの方というのは、これがDVなのかなというような、実際に確定的に来られたのではなくて、こういったことがあるんだけれどもというご相談なのですね。相談日以外に実際に直接私どもの方にご連絡いただいてご本人がいらした場合と、それから警察の方から連絡をいただいた場合もありまして、そちらの方も援助センターと連絡をとりながら、残念ながら専門家ではないものですから、やはり専門家のところにお任せするというのを第一にしておりますので、そういった形で対応させていただいております。

桜 庭：市民さんの身近なところにいろんな機関がおありになると。ただ、件数としてまとめているものではなくて、これは市役所の窓口の女性相談のところの件数ということです。よろしいですか、それで。

(はいの声)

桜 庭：はい、平井先生、何かお手を挙げられたようで。

平 井：「教育における男女平等意識づくりのモデル事業」平成16年度の取り組みについて。

桜 庭：それは後にご説明が入りますので。

ほかの委員さんは今のところご質問よろしいですか。

(はいの声)

桜 庭：また後ほど、もしお気づきになりましたら、手をちょっと挙げて合図してください。お願いいたします。

それでは、平井委員の方から今、教育における男女平等の意識づくり、その件とか、ご質問が出られましたが、では引き続きまして、事務局の方から、このレジュメでいうと三つ目になる「教育における男女平等の意識づくり」モデル授業の取りまとめと今後について、ご説明させていただきます。お願いいたします。

川 村：レジュメ8ページの方をごらんください。モデル授業報告書ということで、一応素案なのですが、皆様は若葉小学校に加えまして、石狩中学校のモデル授業の見学に多くの参加をいただきましてありがとうございました。おかげで3校でのモデル授業、ここに上げられているとおり終了いたしました。

一応、2月の男女共同参画の特集編のときに若葉小学校での取り組み例を載せています。ちょっと関係はないのですが、花川南小学校の阿部陽子先生が3月広報の裏に出ているのですが、ロッククライミングをされているこの方が取り組んでいただきました。

取りまとめの方なのですが、こちら今回の一応素案としているのですが、こういう形で授業をいたしましたということで、また見学された各委員からの意見も載せさせていただいています。この報告書を今年度のモデル授業の報告書といたしまして、協力を願った3校を初めまして、各小中学校、関係機関に報告する予定です。

来年度からにつきましては、一応このプランの中でも推進するに当たっては、担当部局である生涯学習部地域教育推進室というところなのですが、こちらの方が中心となって実施していくことで合意しています。

具体的には、学校教育推進の指針の中にこちらの「男女平等の意識づくりのモデル授業」というのが位置づけされるとともに、予算を要する内容については、地域教育創造事業交付金というので対応する予定でございます。

今後の拡大というか、イメージなのですが、こういった今回家庭科と道徳と性教育での取り組みというふうに集めたのですが、例えば性教育、花川南小で行った性教育の授業というのは、もう既にカリキュラムというか、学校の中で取り組んでいるものなのですね。そういった男女平等に関するいろんなやり方というものを集めたものを見れば、例えばちょっとこういった視点を加えればこのモデル授業になるというか、そういった形で広めていく方向をイメージしています。

桜庭：はい、ありがとうございました。

「教育における男女平等の意識づくり」15年度こういうような取り組みをいたしました。これをベースにしてさらに16年度以降、学校教育推進指針なのですね、という策定の中にいろいろエキスを盛り込むということなのですね。そんな形でスピーディーではないかもしれませんが、一步一步進めていくという方向でございます。

ご質問、平井先生おありではないでしょうか。

平井：若葉小学校の授業を見てまして、やっぱり最初に感じたというか、意を強くしたのですが、やっぱり男女平等は子供たちの小さいうちに学校教育の中で受けるのが一番ベターなのだなというふうな感想を持ちました。

それで、学校等の関係でなかなか難しい面があるというふうに聞きましたけれども、できれば今、CAPがかなり推進されているように、近い将来は毎学年ということになればいいと思うのですが、少なくとも16年度以降に低学年に1回、それから高学年で1回、小学校のうちに2回はこういうモデル授業を年に1回か2回必ず全員が受けられるというような状況をつくれるかどうか、その辺が推進すると、それから資金の手当てもここに書いてありますけれども、どの程度可能なのか、見通したいなものが何かありましたら教えてください。

桜庭：見通しですね。なかなか重たいですね。

今平井委員のご発言は、小学校の間に2回ほどということですね。中学年と高学年ぐらいまでのことで、2回ぐらい意識づくりと教育がきちんとスケジュールの中に組み込まれていくということですね。

平井：そうですね。

桜庭：教育セクションの方でないと、抜本的なお答えはなかなか難しいのでしょうかね。

平井：この男女平等モデル授業、この場合モデルですけれども、そういった授業をそういう推進方法が可能かどうかということですね。そういう方向でこちらからの要望を教育委員会なら教育委員会なりに伝えられるかどうかということですね。

川村：今のところ、この学校教育の推進、指針に位置づけというのは8項目ぐらいありまして、その中に今回のモデル授業というのが入っているのですけれど、そこに一緒にCAPとかも入っているのですよね。だから推進の度合いというか、位置づけとしては同じような形で位置づけはされています。

桜庭：ちょっとその前に、学校教育推進の指針というものは、学校教育現場において、いわゆる先生方の生徒指導資料なのではないでしょうか。これは何の性格を持つ指針なのではないでしょうか。

川村：一応、石狩市で特色のある分野というか、今年度は例えばキャップだとか、このようなモデル授業だとか、地域を知るとか、いろいろあるのですけれども、これだけに重点を置いて、その部

分については、例えばお金がかかる部分については、こういう交付金というもので対応していきましようということで、幾つか重点項目として上げているのですね。その中に来年度からは男女の部分が入ったということになります。

桜庭：平成16年からですね。

川村：はい。

桜庭：ということで、通常のノーマルな学校教育分野の一環に今組んでいかなければならないテーマ8項目。

桑島：今のご質問の答えはそうなのですが、先ほどのご説明のときに申し上げましたように、平成15年度の取り組みとしては、男女共同参画の担当の方でモデル授業を幾つか指定してやっていただいて、それを1冊にまとめて、これも教育委員会の方にももちろん出ていくのですが、こういったものを参考にして、教育委員会の働きかけで学校教育、直接には働きかけていくということなので、もうモデル授業という形ではこれは15年度で終了なのです。

だから、現実の今申し上げた学校教育推進の指針というところに位置づけられたということは、今度は学校現場でやってくださいねというのを教育委員会の方から項目として、男女平等の意識づくりというのが位置づけられたということなので、これから先は詳しい資料につきましては今ちょっと持ち合わせないですけど、教育委員会の方で16年度からやっていく項目の一つに上がったという意味なのです。そういうふうにご理解いただきたいと思います。

平井：その点はそうだというふうに理解していますけれども、モデル授業ですから15年度までで終わる。モデル授業をやるという去年の時点ですけれども、追跡調査の話もされてましたね。このモデル授業を受けた子供たちが意識としてどうなのかということを経後にわたって5年ぐらいという話でしたか、その追跡の調査をするというような。

桜庭：していきたいというね。

平井：いきたいというようなですか。

桜庭：願望といえますかね。

平井：その辺との関係を聞きたかったのですね。学校教育の指針に取り上げられたということは、やはり功績があったと思いますので。

桜庭：そうですね。

平井：今後のこちら側の取り組みとして、追跡調査みたいなものを、1回でどうなのかということもあるのですよね。その辺も含めましてちょっと。

桜庭：そういう例えば教育現場における男女平等の意識づくりですか、そういう学習がどのようになされているかという追跡は個々人のお子さんというか、意識の面はなかなか難しいのですが、いわゆる教育委員会の授業としての追跡はできますよね、プランに書かれている関係というところでフォローアップしていただけますよね。ただ、児童の意識が例えば小学校の3年生でモデル授業を受けたお子さんが小学校の高学年になったとき、どのぐらい意識が変化しているか。

平井：ほかと違うかとかですね。

桜庭：ほかの受けていないお子さんと違うか。さらに中学校に行ったときにどのように変わっていくのか。それが日常の行動とか物事を考えるときの意識にどのぐらい結びついているかという、今後こういう経年の変化というか、これについては何か追跡してみたいというような願望というような。

平井：あのときに、担当された先生のお話で、小学校時代にそういうことを先生が個人的にとい

ったらおかしいのですが、授業の中でかなり取り上げられたクラスは中学に行ってもやっぱり意識が違うと話されてましたね。

ですから、その辺をどういうふうにしたら追跡できるのか。学校現場でやるということであれば、それはそれで構わないのですが、そういったこともあれば、取り入れられる機会があった方がいいような気がします。

桜庭：そうですね、ただ追跡というのはかなり難しい。

桑島：ちょっと今すぐ何とかと言えないのですけれども、教育委員会の方ともいろいろ話をしてみて、何かうまく拾える、例えばアンケートのとりタイミングを考えると、何かできる方法があればぜひ資料としてでも残したいので、やってみたいとは思いますが、今ちょっといい方法がすぐ浮かびませんので、少し検討させてください。

桜庭：委員からのご要望ということで。

それでは、学校教育のそういう指針にきちっとテーマが日の目を見ていくといいますが、堂々といいですか、上げられたということは、本当に短い期間で大変なご苦労だったと思いますし、すばらしいことだなと私は思って、今お聞きしておりました。

ほかの委員、何かご質問、ご意見ございませんか。

お声がないようですか。

(なしの声)

桜庭：それでは、大変何かスムーズな運びであれですけれども、次の方に進めさせてもらいます。

では、次は今日の委員会の協議のメイン事項でもございますが、式次第の方からいいますと「プラン21」の見直しについてでございます。

プランがやっぱりつくられてからちょうど真ん中辺の年になりますが、見直しをするというスケジュールをそもそもこのプランが持っておりまして、その作業に関係することの議題でございます。

では、まず事務局さんの方から説明をお願いいたします。

川村：今委員長の方からあったのですが、プランをお持ちですよ、皆さん。もしなければこちらにございます。

今お話にもあったとおり、平成12年から出発してやっているところなのですが、その間、いろいろ国の動き、時代の動きありまして、中間で見直しということになっています。

今回は推進委員会の中に、ここに仮称とありますが、プラン見直し専門部会、推進委員5名程度で構成で設置いたしまして、まずその見直しの手順について協議を行って、今年度実施しました「男女平等に関する市民意識調査」や市内各施策の進捗状況等を資料にいたしまして、あともちろん皆様のこれまでの活動で持った感想、意見をもとに検討を進めていきたいと思っております。

今後の作業日程なのですが、今日この専門部会のメンバーを選定していただきまして、4月ぐらいに問題点の抽出、課題を絞り込みます。5月に第1回の推進委員会開催を予定していますので、そちらの中でその抽出された課題について意見をいただいて、もんでいただいて、承認していただく。また7月あたりまでに見直しの素案の作成、8月に第2回の推進委員会を予定していますので、その中でまたその素案について検討いただきまして、承認をいただいて、9月に今回第2期は9月いっぱい任期終了ですので、委員の改選ということで、今回その専門部会にかかわっていただきましたメンバーの方には原則継続して委員をお願いしたいと思います。11月に最終報告として、提言としてまとめるといいうスケジュールとなっています。

このメンバーにまずうちの推進委員の委員長であります桜庭委員長の方をお願いしたいのですけれども、いかがでしょうか。

桜 庭：何とかお手伝いいたします。

川 村：よろしくをお願いします。あと4名ほどのメンバーなのですが、委員長の方からメンバー選定についてはよろしくをお願いいたします。

桜 庭：何か大変荷の重い仕事がやってまいりました。

私、実は札幌市民でございますので、いかがかなというちょっとためらいもございますけれども、一生懸命石狩さんの方に目を向け、体を向けて走ってくるようにいたしまして、できるだけ委員の皆様意見をいただきながらプランの見直し、それは石狩市民さんにとって有用なプランにするものがありますので、何とかその方向で頑張りたいと考えております。本当はとても重いなという気分もありますけれども、大変私、専門部会委員のメンバーということを考えさせていただいて、このプラン改善を広い分野にまたがってございますので、一番わかりいいのはプランの見開きのところに計画の体系でございますけれども、これを見ましても、ありとあらゆることがございます。大きな基本目標のところを見ても、大きく5つございます。意識づくりから、さまざまな政策方針決定といえますか、具体的な、それから働く場における男女共同参画というより、むしろ女性の参画ですよ、女性の活用、それからさらに女性というか、男女ともなのでしょうけれども、それぞれの方々の将来にわたっての自立を支えるような社会的な環境を整えていこうという、これは際限なく広いというような目標の設定もございまして、さらに生涯にわたる女性の健康、自立支援といえますか、こういう本当にすべての分野にかかわるテーマを持つプランでございますので、できるだけさまざまな活動分野をお持ちの方の専門部会委員が大切ではないかなと考えました。

それで、事務局さんの方から5名ほどという枠組みがございまして、それで委員さんの名簿を見て随分考えてみましたが、まず大変僭越ですけれども、木村委員、全体的なものに目を向けていただくということで、木村委員をまず専門部会の委員にぜひともご参加いただきたいと、私考えました。

それから、お二方目は女性の就労、大変大きな問題を抱えております。どこから手をつけていいのかという悩みも大きい分野でございますけれども、何としてもやはり石狩のまちを元気にしていくには、女性の働くという活力だと思えますね。どのようにお知恵を絞ってといえますか、うめきながらも、苦しいでしょうけれど、絞り出していただくように、松下委員にお仲間に入っていただきたいというふうに提案しております。

それから、市民意識調査の中にも子育ての分野とか、それからお年を召した方の介護問題とかという、生活に密着したテーマに大変市の行政の充実を図ってほしいというご意見があったかと思っておりますので、三浦委員、専門部会の委員をお願い申し上げたいなと思っております。

私も一つ席をとらせていただいたものですから、もう一方、この委員会の中でぜひプランの見直しに私も加わって汗をかきたいと、かいていただけるという方の自発的に手を挙げていただければとても助かるなど。私、自分を含めて4人でちょっと行き詰まりまして、ごめんなさい。そんなことでございまして、どなたかお願いできる、今、私、木村委員と松下委員と三浦委員とお名前申し上げさせていただいたのですけれども、なかなかこれ大事業でございまして、もう本当に作業部会です。本当のことを申し上げますと。

そういうことですので、やっていただける方がございましたら、ちょっと合図をしていただければとても助かるのですけれども、いかがでしょうか。

5人満たさなくても、事務局さん、よろしいですか。4人という形でも。ちょっと作業があるもの
ですから、余りご無理をお願いするものかどうかと思いますし。

川 村：大変申しわけないので言い忘れてしまったのですが、今回この委員会の中で皆様に報
酬ということでお支払いしているのですが、専門部会に関しましては、ちょっと予算がないもので、
なるべく推進委員会の終わった後に作業をするだとか、そういう形で進めていきたいと思
いますので、ご了承いただきたいと思います。

桜 庭：シンプルに申し上げますと、全く無報酬でございます。

ですから、汗はかいていただきます。知恵は出していただきます。ですけれども、何もございませ
ん。石狩のために頑張りましょうということでございますので。

それでは、お声がないようですので、4人の委員の方々に頑張ってプランの見直しという形をして
いただきますでしょうか。今からでも遅くありませんので、私もやってみましょうという方はどうぞおっ
しゃってください。男性、女性ともどちらでも問いませんので。何か皆さん静かですね。

事務局さん、特にございませつか。この分野の方をお願いしたいとかという。全部の分野になると
本当は皆さんに入っていていただくが一番よろしいのでしょうか。

桑 島：全く個人的な思いつきですけど、高谷さん、いかがですか。目の前にいらしたので。

桜 庭：いかがでしょうか。

桑 島：いろいろボランティアの活動もされているので。

桜 庭：そうですね、いかがですか。お忙しいでしょうか。

高 谷：よろしいですか。

桜 庭：やっていただけますか。ありがとうございます、ということで、事務局が当初考えていら
したように5名の専門部会の委員がそろいました。ありがとうございます。

それで、専門部会、木村委員に専門部会長さんという形をお願い申し上げたいと。もう強制ですよ
ね、これは。

木 村：力不足ですけど、では。

桜 庭：よろしくどうぞお願いいたします。私は自由な1委員になりまして、ごめんなさい、申し
わけありません、急なことですけど、お願い申し上げます、ということで、おかげさまで仮称でござ
いますけれど「プラン21」の見直しの専門部会のメンバー、おかげさまで決めさせていただきました。

ここから今日の本題でございますが、「プラン21」を見直すに当たりまして、これだけの広い分
野でございます。専門部会のメンバーだけが汗を流しましても、やはり目線の届くところ限りがござ
いますので、私今日この後、委員会の時間全部使いまして、「プラン21」の見直しに当たって、皆
さん委員さんがこんなことを見直しの視点に必要ではないかとか、こういう問題があるだろうから、
こういう対応をするプランとか、あの辺の見直しが必要ではないかとかというご意見、ご感想でもよ
ろしいです。この委員をお引き受けになる前から胸に温めていただいたテーマでもよろしいですし、
この委員になられてからまたご経験もご体験もされた上でさらにこんなテーマを必要でないか、ある
いはプランの中にあるけれど、要らないのではないかというご意見もあろうかと思
いますけれども、この両用どちらでもよろしいのですけれども、どんどんご意見をいただきたいと思
います。

そうしないと、専門部会のメンバーもギブアップしてしまうと思
いますので、あと少し、相当時間
ありますでしょう、この時間にざっくばらんになかなかそのいただいたご意見をうまくプランの中に

なじむかどうかはそしゃくも要るといいますか、少し取り組む面を変えたりとか、いろんな作業もあるとは思いますが、まずはこんな部分の取り組みが必要ではないか、これは要らないとか、ご関心を持っていただける分野のテーマがこのプランに入っているかどうか、そういう点検も含めて、ご意見をできるだけたくさんちょうだいしたいと思います。

なかなか結構量が多いのですけれど、全部一とおり見られると重たくなるので、重たいのですよね。

木村：これはできてから2000年3月発行ですね。このプランをつくられたときの社会状況というか、いろんな制度の問題はこの後ろの時間の流れのあれですね、女性行政の歩みとか、それが71ページほどにあるのですけれども、この後これはどちらかという世界の動き、日本の法令とかの、法の制定とかの流れ、北海道の動き、石狩市の動きということになっているのだと思いますけれども、大きな変化の要素はどんなものだと思いますか。

桑島：やはりちょっと先ほど早口で説明してしまいましたけれども、このプランご指摘のように平成12年3月、年度といたしましては平成11年度の作成で、12年度から推進してきたわけなのですけれども、その後基本法の方が制定とか、それから育児介護休業法ということで、お休みをとっても多少認めてもらえるようになったという部分が広がりました。

それから、保育士さん、看護師さんと、今までは女性の看護婦さんというのが一般的に呼ばれていた名称だったのが、そういう女の人にこだわった言い方やめましよう。これは逆に女性ばかりの職場だったところを男性に開放したという意味合いもございまして、こういった動きもございました。

それから、今のDV、ドメスティックバイオレンスの防止法の方ができたりしまして、その辺も少し時代の流れに沿った動きというあたりになると思います。

桜庭：はい、ありがとうございます。

野：もう一つ石狩市の大きな流れで、平成14年度に「市民の声を活かす条例」というのを制定いたしました。これは市の行政活動のあらゆる分野の中に市民が参画をすると、していただくというような形の、言ってみればルールづくりが行われまして、その中で各審議会、今46以上ありますけれども、その条例の中に公募委員、それから委員の構成メンバーについては、男女比がそれぞれお互いに4割以上、要するに男女比率がどちらでも40%以上確保しましょうということも、その「活かす条例」の中に明文化されています。

そういうような部分を含めて、市の活動に男女比の部分の明確に各審議会を含めて明示したというのは、プランの中では5割という形になっていますけれども、そういう部分では非常に意味画期的なルールづくりが行われています。

桜庭：そういう意味で市民にとっても、地域の声を活かす中で、男女がいい比率でといいますが、共同参画を実現するもっとベースになる比率を明確に決められて、その形で運営するということですね。余り難しく、どうぞお考えにならぬよう、発言して下さい。

三崎：今のに関連してなのですが、比率だけではなくて、例えばほかのところの石狩市には条例という言葉は書いてないのですけれども、何年度までに女性の管理職を何%にするのだというか、そういうような細かなものを追っていくようなものを明確に出していったらいいかなと思うのですよ。

桜庭：数値目標とかをですか。

三崎：ええ。何%と言ったら漠然としているから、それを何年までに管理職をどれくらいにするという。

桜庭：今ご発言の趣旨は市の職員さんのこと。それはあらゆる分野ですか。

三 崎：あらゆる分野に。

野：市の職員の関係なのですけれども、今女性職員は大体100名ぐらいいますか、109名。人数的にはかなりおられるのですけれども、実は15年度から管理職の昇任試験制度を導入しています。そこに女性の方が1人も応募されていないというような状況もありまして、できれば女性の方を特別に昇格していただけないかというような話もしているのですが、基本的には女性職員のやってみようという積極性というのがなかなか現実問題としてあらわれてこない状況にあります。

ただ、今の若い方といいますか、あと五、六年ぐらいすれば恐らくかなりそういう方も出てくると思いますが、現状ではなかなか厳しい状況にあります、市で管理職の女性の数を数値目標としてなかなか設定しづらい状況ではあります。

ただ、そういう環境づくりはやっていかなければいけないと思っていますけれども、現実的にはかなり厳しい状況になっていますね。

桜庭：道内の教職員さんの中の女性の校長先生の状況にも似ていますね。

平井：今のそのお話ですけれども、それは個人の意識の問題なのか、それともシステムの問題なのか、その辺はいかがですか。どういう考えを。

野：女性の職員の方というのは、そもそも、最近は違うのですけれども、例えば福祉関係とか、それから保育の関係とか、以前ですとかなり限定したセクションに集中していたというような状況がありましたけれども、最近ここ四、五年でしょうか、かなり全般的に女性職員の方もいろんな業務に携わっていただいていますので、意識の部分ではこれからかなと思っはいるのです。基本はやっぱり意識だと思っのですね。

そういう意味では、そういうやる気を起こさせるような環境づくりが組織全体として行われていたかどうかという部分については、やはりもっともっと検証していくべきだと思いますけれども、現実問題としてなかなかそういう声をかけても反応がいま一つないというのが実態です。

桜庭：ちょっとざっくばらん過ぎたような発言させていただきますと、私の個人的な経験でも女性に所掌させる事務というのは決まっていることが結構多いのですね、特定されている。そういたしますと長い時間職場にいますのですけれども、1種類のこの仕事しかしたことがない私が突然全く違う部署に行って、違う仕事をしろと言われても私の元気のあったようなおばさんでもおじけづくのですね。余りにも経験が単一のために。

若いときから、この仕事も若いときに一番下っ端で、この仕事も若いときにした、ここで経験しているとすると、どっちもさわってみたことがあるということが一つの自分の自信というか安心感になって、ある年齢になってほかの力がもし仮についたとして、そこで登用となってもびびらない、びびるの程度が小さいとか、なるのですけれども、余りにも似たような分野の職場の仕事しか経験がないと、恐怖になるのですね、違う仕事をほかにさせられるということが怖いのですね、本当のこと言いまして。

松下：ですから、少なくとも公務員の世界ではシステム的にそうするというのはあり得ないと思います。例えば消防士だとか、特に男の力とか、そういうような女性はやっぱり子供を産むとかいろいろそういうことがあるので、やらされないというのがありますよね。一つはね。

ですけれども、それはその辺ではなくて、一般の行政をやる上では多分組織的にここを配慮するとかしないとかということではなくて、ご本人の意識によって動いてきたというのが現状だと思います。

ですから、それはそういうものはつくっていかんかったという組織も悪いのですけれども、それは

もちろんこれから少し時間かかると思いますけれどね。

榎 本：やっぱりシステムですね。

桜 庭：システムなんです、やっぱり。ですから、男性も女性も新米のときはこの仕事を1回経験しましょうと。2年生になったらこの仕事も経験しましょうと。ある程度公平にフラットに経験していくと、それなりにその環境の中でそれぞれ育っていくというか、力をつけていけるといえるか、自信もつけていけましょうし、というプラス志向に回転していくという感じです。そういうものが組織のシステムというか、そこの中に入づくりというものがきちんと位置づいていないと、なかなか人は育っていかないというか、力を蓄えていきづらいというところありますよね。

松 下：企業の中でも、例えばダンプの運転手さん女性ですから、もう女性も男性も一緒ですよ、いますよね。だからそんなに差はない。

ただ、行政でも特殊な危険なそういうようなものはまだ女性はやできない。その辺のところは全部を100%そうなる、なかなかそうはいかない部分も現実としてありますよね。

榎 本：建築現場でも割と簡単なものは女性も今結構入ってきていますね。

松 下：ですから、例えばとび職とか。

榎 本：それはちょっと労働基準法でもちょっとそれは無理ですが、簡単な内装とかにはどんどん女性が入ってますからね。女性でもそういうの好きな方もいらっしゃるからね。非常にいいことではないかなと思います。

桜 庭：限られた分野には、とび職のように一つの社会の慣習がとても強い職域もありますよね。

木 村：そういう分野はまだ、よしあしは別にして若干はあるでしょうけれども、大阪府の知事さんのような土俵に上がるとか上がらないとかと同じように、そういう何かどうなのかなと思いつつもいろいろありますけれども。

松 下：男女共同参画でもね、労働基準法でもある程度分けているところがありますからね。平等ではないところもありますから。

桜 庭：あれこそ問題ですよ、土俵。委員会の場でこんなふざけた話題出してすみません。

平 井：三崎委員のお話で、非常に今ごろ基本的なことでもちょっと申しわけないのですけれども、平成10年度からおおむね10年間、これが最終的に目指すものが条例の制定なのかどうかですね。今三崎委員が言われたのは、もし条例を制定するのであればその中に盛り込んでいくことも可能かなと思う。

石狩市として、男女共同参画推進条例と、そういったものを最終的に目指しているのだろうか。プラン21の中にはそれに触れていないみたいですが、その辺はいかがなのですか。

桜 庭：それはまた重大なご意見ですね。

今の段階で事務局さんでご説明できる可能な限りで。

野 田：男女共同という部分というのは、いろんな例えば市民活動の面からとか、それから社会生活の面からとか、全体的な部分からいろんな視点があるのですけれども、最近特に男女共同の関係で条例をつくる都市が少しずつ多くなってきていることは事実です。

我々としても、条例をつくってしまえばいいというのではなくて、条例をつくるためにどんな行動計画ができるかということまできちっと意識して条例をつくらないと、結局理念条例で終わってしまう部分がございますので、そこら辺現実的にどういう行動ができるかと、そういう意味では今のプランの見直しの部分で度合いを図ってみたいなという思いはあります。

確かに、今の市長の2期目の話の中に、男女共同の条例化みたいな意識をしている部分はあるので、行政としてもですね。先ほど言いましたそれが本当に行動できるような内容になるかどうか、その部分がちょっと心配だなという部分がありますけれども。

松下：結局、これを条例化するという事は、ある意味では規制する、義務づけるということですよ。目指すというのは理想ですよ。理想が従来ないわけではないけれども、その前にどういう方向、社会づくり、仕組みをするかということは、必ずしも条例でなくてもいいわけです。みんながそういうふうな同じ価値観を持てばいいわけですから、だから規制だとか、義務づけを強制的にさせるということになれば、条例が必要ですけど、今はその段階、必要性といいますか、そんなようなことではないわけですよ。

野：北海道では男女共同の条例つくっているのですよね。

桜庭：はい。

野：この種のやつは例えば条例だけをつくろうと思ったら、幾らでもつくれるのです、極端に言ったら。地域性は特にないわけですから。ですから問題は石狩市でその条例をつくったときに、果たしてその条例の部分をきちっと先ほどから言いましたように、石狩市としてきちっとその条例の趣旨を発揮していけるかどうかという部分の検証が非常に難しい部分があるのですよ。

平井：私のとらえ方はちょっと違うのですよね。要するに条例をつくるということは、今話した松下委員さんが言われたように規制という面もありますけれど、逆にその理想としてプランを策定しても、それこそ理想論で終わってしまって、なかなか進行しないというようなもの必ずありますよね。

だけど、条例を制定すれば、条例には検証機関がある。それから情報の苦情処理機関も設けなければいけないとか、そういうことでフォローができるという面で、条例の制定というのはやっぱりプランとは明らかに違うと。ただ、上からの規制というような考え方をするか、そうではなくて本来あるべき社会を目指すために、その整備をするというふうに考えるかということだというふうに私はとらえているのですけれど。

野：プランをつくっていく中で、これは市がつくるのかどうかという意思を市が決めるのではなくて、例えばその推進委員会の中で、その条例を近々に目指して取り組むべきだというご意見が結構たくさん占めていくような形であれば、それは当然行政としても考えていかなければいけないテーマだと思っておりますし、条例というのは事務局としてもイメージをしていないわけではないのです。

ただ、先ほど言ったように、行政が、ではやりましょうというような形のものではないものですから、そこら辺も含めて本当に行動力といいますか、少なくとも条例をつくる以上は理念条例ではしたくないなと。それから市の意思としてはきちっと表現できるのでしょうかけれども、現実問題、先ほどから言うようにきちっとした行動計画をやっぱりつくっていけるのかなという部分がありましたから、プランの見直しの中でそういう意見がどんどん大きくなってくれば、市としても考えていかなければいけないかなと思っているのです。

桜庭：いかがでしょうか。例えばプランの行き着くところで条例を目指したいというようなご意見お持ちの方はほかの委員ございますか。今平井委員からのご発言なんですけれども。

松下：私ちょっと申し上げたいのは、条例はどちらかというと、義務づけると。その前に基本プランをつくりますよね。このプランがどうしてもうまくいかない、これは条例で義務づけしないとプランがうまく進行していかないという意識がこれは当然条例というのは必要になると。今はそうでなくても皆さん理解しながら、これはもう男女は平等だということで社会が進んでいるわけですから、

今その段階には来ていないのではないかと、時期尚早ではないのかなという、私は感じたものですが、これは絶対進まない、どうしてもこれ規制でもしないと、強制的にしてやらないと理想的にいかないということが出てくれば、これは当然、市役所の方をお願いをして条例つくってくれということが起こってくるだろうというふうに、まず条例ありきではいけない、そんな感じですけども。

桜庭：多分、この種の条例というのは、行政はこういうことをしなければならないという行政の役割。もちろん石狩市民さんのお一人お一人の市民もこうしなければならない。あるいは経営者である事業者もこうする、学校教育関係はこうしなければならない。それぞれ一定の義務を課せられるわけですよ。そのそれぞれの方々のそれぞれ場面場面でチームになって、条例の趣旨するものを実現されていくという、当事者にならなければならないのです。ですから目標設定と同時に、それぞれが何らかの義務を負うというような条例にならざるを得ない性格があるわけですね。

その辺がありますので、やはり市民さんの中でこの条例というきちっと目標設定値があって、約束事がきちっと市民に公開、これも公開されているのですけれども、そういう形のものをきちんと制定して、それに向かってそれぞれ義務も背負うよと、それから行動もするよと、役割も果たすよと、こういうふうになってこなければならぬのですから、やはりいろんなご意見があるところだろうと思うのです、条例というのはですね。

ですから、平井委員のおっしゃったように、もちろん条例の中に男女平等参画を阻害する問題があったら、いわゆる行政のオンブズマンではないですけども、苦情処理委員のような形で問題提起されて、その方が第三者機関として、ある程度行政の取り組んでいる仕事の中身も点検できる、あるいは提言できるとかという、一つ行政からちょっと離れた意見も出されてやれるという機能は、それも大中小いろんな形があるのですけれど、たとえ 条例というのはそういうものをつくり得るというものではあるのですけれども、多分にその何かすべて市民側は受け取り方で、行政が義務負担者というような形でない条例になるのですから、そういう意味でいろいろご意見をいただいた方がこれは助かるテーマだなと実は思っているのです。

私も条例づくりにかかわったものでございますから、へらがらい目に遭いましたし、3年間。それでその辺の道民側の要求と行政側、それから企業経営者側、さまざまなジャンルの人方と意見交換をするわけですが、決して接点がないですね。それを結局条例という一つの型式にまとめなければならないということになりますので、こちらを立てればこちらが立たない、絶えずそれが起きるわけですよ。それが極端なのが男性と女性であって、女性の要求を条例に盛り込むと、男性がそんなもの要らんという、こういう本当に衝突してしまうのです。どちらも道民なのです。それがそういう市のレベルでいうと市民さんなのです。

そういう状態が如実に出てまいりますので、かなり活発な意見と申しますか、十分に意見を、声を出し合わないと、形だけで条例つくっても余り意味がないということはあるですね。ただ女性側はそれがあると、シンボルの旗ができたという喜びには感ずるのでしょうけれど、それでは余り条例というのは役割を十分に果たし得ないかなという思いを。

はい、どうぞ。

三浦：何か緊急性を帯びている、私が感じているものは、育児休暇とか、介護休暇というところで、先ほどの条例の話があったにしても、それを実際にとれるかどうかという部分で、公務員であったり、学校の先生だったり、そういった方々はとりやすいであろう。ただ企業というところで、なかなかそういうのを出していけない状況にあるという部分があって、これはもう女性、男性にかかわら

ず、男性が介護をする、男性が育児をする部分で、この理想をいつまで言っている、できないところだということは実感しているのですね。ですから、そこがその条例だけというわけにはいかないと
思うのですが。

桜庭：そうですね。とても難しい分野です。

三浦：ですから、やっぱり昨年、道の主催されたものに出たときに、そういったところで意識を持ってくださる企業がちょっとでも増えればということが、みんなの意識レベルになってしまっているの
でしょうけれども、そういった気持ちが強くなってきましたね。

桜庭：育児、介護休暇そのものがきちんととれるという。

松下：やっぱりとりづらい。企業も大変ですからね。

三崎：参加して1年半ぐらい過ぎて、本当にさっきの学校教育で「男女平等モデル授業」が指針
になってすごくいいなというのはあったけれど、実際本当に授業日数で何時間入れるのかとか漠然と
しているのですね。それでいいのかなと思うのがあるのと、それからそのプランの15ページ、
大分前に読んだときに線を引いていたと思うのですが、PTAの父親の参加を実際具体的にどう
いうことをやったのかとか、すごく漠然としているというか、本当にやったのだろうか。

でも、自分が推進委員やってこう見てきた中身が本当にこの先どうなっていくのだろうかというの
がすごく確かではないのですね。そのところがちょっとどうかと思ったものですから。

そして、さっき課長さんが言ったように、100人の女性職員がいると言ったけれど、採用の人員
はどれぐらいなのかとか。

桜庭：毎年ですか、新規採用ですか。

三崎：新規採用を初めから女性を少なくしているのかもわからないし、そういうところがどうな
のかということと、何かいっぱい課題があるのですね。それならこう絞って行って、やっていった
方がいいかなというところを感じたのですね。

木村：新規採用さんは点数順位ですね。

野：そうですね、私も職務上試験官を仰せつかっているのですが、女性職員の方が多いで
すよ、採用は。男女の比率からいくと2対1ぐらいですかね。それぐらい女性職員の方が優秀ですね。
試験のときは。最近は本当に男女関係なく、すごく優秀な職員が入ってきてくれますので。比率から
いうと本当に女性の方が多いです。

桜庭：それでは、部長さん、余り優秀な女性職員が入ってきた方が管理職になっていかないと、
石狩市としては戦力がダウンしますよね。本当総体的に言いますと、女性だからということで大活躍
してもらわないと、ちょっとおしとやかにしていただいたら。

野：そうですね、今の30代ぐらいの女性職員が、今30代前半ぐらいでしょうか、その職
員方が管理職になるころの年だと、一気に多分。

桜庭：逆転ですか。

野：それぐらい活躍してくれると思うのですね。それまでがかなり。

松下：だから機会は平等に与えられていると思うのです。

桜庭：では、そういう意味ではちょっと息長く楽しみに待ってください。

ほかにプランの見直しに絡めて、ご自由に思っいらっしゃることをご発言いただきたいと思いま
す。今日ご発言いただいている委員さんにとくと、こう言ったらだめですかね。

高谷：私はやっぱり(テープ反転)就職、仕事に打ち込める環境とそれから生活の中での充実感

という部分を目指していきたいなと思いますね。

やっぱり60歳定年というのは余りにも若過ぎて、早過ぎて、60でも物すごく元気な50歳ぐらいの体力と能力とある60の方も本当に多くいるという部分で、60や62、3の定年は早過ぎるのではないかなというのが、今すごく痛感しておりますね。

そういう部分の健康、精神面の健康と肉体的な健康、両方の健康を維持するためにも、やっぱり余り早期に定年してしまうという部分ではマイナス面が多いのではないかなという部分もありますし、単なる経済的なものばかりではなくて、そういう精神的、肉体的な健康を維持するためにも、そういう部分とそれから1人の子供を今核家族が多いので、能力のあるお母さんがせっかくいい職場に行っていて、子供を産んだばかりに育児休暇がなかなかとれない状況の中、保育園の問題だとか、いろんな環境の中をいかに社会が1人の子供にかかわり合って、大切に育てていける環境をつくるかという部分と両方の面をこういうふうな中で話し合いでいけたらなとすごく思っております。

桜庭：何かプランに生かすようなアイデアを。

高谷：ええ、何かアイデアを皆さん吸い上げてね。

榎本：女性がどんどん社会参加して、そのために少子化になるというのでは、これはまた社会的にちょっとね。そういうことも考えられますからね。難しい問題です。

桜庭：永谷委員、いかがですか。これからの世代ですから。たくさんご注文を出してください。

永谷：この間、私、3月の初めの方で保健福祉課の方で実習に行ってきたのですね、栄養士としてなのですけれど。そこで一応福祉関係のことをいろいろ資料をいただいて、そこはたまたま保健センターに行ったのですけれども、そこで両親教室というのを開いているのを見てきたのですけれども、その回はまだ母親だけの回で、2回目以降父親と母親が2人とも両親で参加して集まって、育児についての講座を受けるという人もいますんですけど、それは何か毎年何回か開いているそうなのですけれども、そこでだんだん回を重ねるごとに父親の参加も増えているという話を聞いて、そういう写真を見せていただいていたのですけれど、健診の方にも1歳健診とか1歳半健診というのにも父親が一緒に来て付き添っているのを見たのですね。その意識が変わっているのがちょっとそこでも見られたのが、私はすごい勉強になったのですけれど、でもまだそういうのを開いているというのを知らない人もたくさんいますので、それを進めていけたらと思います。

桜庭：まだ男性は企業戦士でいらっしゃる。

はい、ありがとうございます。

木村委員もご発言がないようですね、今日。ございましたか。

木村：4年たっているということで、最終目標というか、どこに設定されているというのかなというのがちょっと私自身よく見えていなかったの、それで皆さんのご発言聞きながら、感じ取っていけるかなと思ったのですけれど、まだいまだにちょっとどの辺に焦点を当てていくのかなといった、その目標ですよ。それが定まってないような気がして、それは最初に掲げた問題としてこういうことがあるのでしょうか、こういうをつくっているある程度目標みたいなものが必要になってくるのかなというのが感じられていまして、私自身これらの作業をしているとき、どういうふうにしていったらいいのか、ずっと考えながらいたものですから、質問というよりも本当に余りにも幅広い問題が多くて、この2回目にまとめていく段階で、どういうふうにまとめていく何か集約点みたいなものがまだ見えていないので、私自身困っている状態なのですけれど、皆さんにお諮りしていただければというか、ある程度どういうところを目指して、今回つくっていかねばいけないのか、

ちょっとまだ私自身見えていないのですけれども。

これ全部に答えを出していくというか、今後どういうふうにとというのは、かなりのこれ資料もつけていくとかなり分厚くなりますよね、これ全部に。ですからそういうことで、どこに今回重点目標が二つ三つ絞るとかその辺質問というか、させていただきたいと。

松 下：個人的な見解で話しますと、世の中に人間、女性でも大体フィフティー・フィフティーですけれども、半々に。今は女性が多いかもしれない。いずれにしてもフィフティー・フィフティーですよ。男性の特性を生かした生活、女性の特性を生かした生活、両方ともできる生活、いろいろ大体三つぐらいに分かれますよね。

ところがいろいろあって、男女の差別でもってゆがめられて、これをいかに真ん中に持っていくかと、これは最終目標は恐らくできているということに近いだろうという考え方なのですよ。

ですから、それにゆがんだものをもとに戻すためにどういう方策をかければいいのか。これ恐らく男しかできないものも必ずありますし、女性しかできないもの、全部平等ということはあり得ないと思うのですよね。

でも、価値観からいろいろな行動から大体半々くらいかなというところ、これ私個人の見解ですよ。そんなことを話してたのですよね。これいいかどうかわかりませんよ。

桜 庭：ありがとうございます。

石狩市さんのプランだから、目標を一応設定して、それが時間経過でどのくらい実施されて、その次点検する、「plan do see」というふうにある程度男女がいわゆる平等にというか、いろんな分野でそれぞれ力を出せるというようなものをつくっていくためにということで、そこに上げているような項目が、例えばどちらかに大きくぶれていたら、ぶれの部分をできるだけ中立の真ん中辺のラインに持ってくるような意識の面でも、実行の面でもという、そんなふうに持ってくるように、一番うんと反対に大きくぶれているのをこっちに修正していく、大きくぶれているのをこっちに持ってくる、これは男性、女性も両方あると思うのですけれども、そんな形を進めていくのがこのプランだろうとは思っているのですよね。

ただ、何かそれでは永久に「plan do see」と進みそうなので、何かどこかで一つの着地点みたい、先生のおっしゃるように、そういうものが必要になってくるのかなという気はいたしますけれど、まだ石狩さんの方では市民さんのそれだけの欲求がまだ届いていらないという、まだ難しいすごく実態がぶれていても、問題点の提起というのか、そういうものがまだないということもありますし、今のご発言のように、石狩市の市の職員の中の女性の登用ということがひどくぶれていると、反対側に。中庸からはほど遠いということで、そういう出ているものなるべく真ん中に持ってくればいいのか。真ん中も幅あるのです。お豆腐でばーんと割ったものと違って、それぞれ女性の特性、男性の特性をちゃんと加味した上で、そんな見方だろうとは思っているのですね。

一番見やすいのは条例とかが一番見やすいでしょうけれども、それも中身があって、本当に市民のために有用な条例になるということで、また熟成の時間が必要という事務局さんのご発言ですよ。

松 下：だから、例えばこの「男女」と、何で「男」が先になっているのか。これもやっぱり一つの差別になのかもしれないですね。

桜 庭：こだわればですね。そういうご意見も出てくるわけですね。

榎本委員、いかがですか。

榎 本：今のところちょっとないもので。

桜庭：はい、ありがとうございます。

大橋委員、いかがですか。

大橋：ないです。

桜庭：ないですか。そうですか。

紙谷委員はいかがですか。

紙谷：ないです。

桜庭：ないですか。

これだけは何か見直しのときにはやっぱりちょっと手をつけてほしいなというか、関心を持っているのですよねというような。

紙谷：もう皆さん言うてくださったから。

桜庭：ああ、そうなんですか。

中村委員はしばらくでございますので、ぜひ今日は今までの分も取り返してご発言くださいますか。

中村：仕事の関係でなかなか出られなくて。

桜庭：いえ、いえ、そうでしょうと思いましたが。

中村：私、農業なものですから、どうしても若い奥さん方が赤ちゃんが生まれまして、うちの方の保育園、1歳半からかな、なんですけれども、やっぱり仕事の関係がありまして、なるべくならもっと早く、ゼロ歳児かな、預かってくれるというか、そういう部分あります。ですから延長といたらおかしいか、そういう実態もあるのですけれども、やっぱり先ほど高谷委員から少子高齢化の問題、これは今の日本最大な問題なのですけれども、中でも子供さんを預ける環境はやっぱり整備されていないから結果的にこういったことが起こってくるのかなという気がします。

そういう意味では、なるべく子供をしっかりと預けてもちゃんと女性が働いていけるような、そういう環境をつくっていける、それもやはり石狩の中で実現させるために、方策、プラン見直しの中で検討してもらえばいいかなと、私は思っています。

桜庭：特に農業の女性というのは、ご一緒に働き手になりますしね。

中村：そうですね。ですから、そういう意味では親が見てくれれば一番いいのですけれども、親も一緒に働いたりするものですからなかなか難しいのですね。かといって置いてもこられない。おれら小さいころはござの上にかごか何かに入れられて。

桜庭：昔はいずことか何とかといましたよね。

中村：私もござの上に飛んできたハチを踏んづけて、足を刺されまして、そのところだけすごく小さかった記憶ですが。そういう意味では非常に恵まれているのですけれども、もうちょっとやはりよりよくしていければいいなというふうに思います。

桜庭：はい、ありがとうございます。

いろいろご意見ありがとうございます。

出尽くしましたかねえ。皆さんのプランの見直しに当たって、こんなテーマをというご意見ですね。ぜひとも検討していきたいですねというご意見をいただいていますけれども、ほかにございますか。

平井：2年近くやってきて思うことは、理念としては非常によく、当然推進していかなければいけないし、啓発運動もしていかななくてはならない。

ただ、何か具体的なことを推進するために、何か具体的なことをやろうとしたときに、やはりその

予算措置が必要になるというような場合に、今の特に今年度ですか、平成16年度ですか、石狩市の財政は相当厳しいものですので、そういったことを考えあわせると、ちょうど平成16年度見直しの間中期に当たっているのですけれども、その中に具体的なものを入れていくというのは、プランなので、具体的なものを入れるのがいいのかどうかという問題ありますけれども、ちょっと難しいのかなという気がするのですね。

そうすると、見直して現実の社会のと今まで半分推進してきた中での改定するというのはいいことなのですが、何となく靴の上から足をかくという、そういうような、どうしてもぬぐえないのですよね。その辺、だからこうすればいいということはないのですけれども、そういう感想を持っています、ではできるのからやったらどうだとなると、私の担当分野である学校の中でというような、そんな形でしてしまうというのですか、そういう何となく推進していくという皆さんの意気込みはもちろんあるし、我々もそう思っているのですけれども、おっしゃったように分野が広いですから、全部プランとしては必要で、でも推進するという立場になると、その辺のギャップというのですか、そういういららが少しあるかなと。感想なんですよ、そこをどうしたらいいのかというのが、これは途中で改定して見直すときに、どういうふうにすればいいかなというのがあります。

桜庭：やはり、プランですから、必要な分野は全部入れなければプランの意味はないですね。

ただ、それをその推進、実施に当たるとき、その時々時代のテーマもあるし、緊急のテーマもあると思うのですが、その辺の優先順位みたいのをある程度委員会がウエートづけみたいなのができて、それに伴って事務局の方でそれに必要な最低の予算がとれれば、なおこれはすばらしい形になるのですけれど、その辺が例えば委員会から、ぜひとも、例えば学校教育のこの分野を最優先で進めてほしいと、プランの推進に当たって、そう仮に決めたとき、それに伴う予算措置というのを事務局から市の内部で協議されて、予算づけまで結びつけられるかどうかというのは、もちろんそこにネックがありますよね。

その辺はこれからこのプランを進めていく上で、すべてに当てはまってくるわけですよ。今までの既存の事業のアレンジだけでできるのかという部分が出てきますので、そこはこの壮大なプランの場合、いつも悩むところですね。何もかもが入り込んでいるものから。

そういう意味で、もし予算に反映するのであれば、この委員会の作業も市の予算要求の前にもう意見をまとめて、市にお願い申し上げて、そして市の中でもんでいただいて、予算化まで、違うセクションも含めてご努力いただくということになってくるのですよね。

そういうこの委員会の意見が本当に市の施策に生かしていくには、そういうローテーションというのが、そういう形を含めていかなければ、結局は委員会のメンバーは何かむなしさを感じるということになりますよね。

桑島：日程的なことを先ほどちょっとざっと説明させていただいたときに、11月までに何とか提言という形でいただけるようにしたいのだというお話をしましたが、実際はこの間に、実際の施策の部分で各担当課が担っている部分というのがかなりありまして、その事業の方は洗い出しと、それからまだ調査の途中なのですけれども、続けておりまして、そちらの方と、それからここから出される中間見直しで問題点、課題というのを抽出したものとちょっと合わせてみないと、実際どんなふうな問題があって、それが発生してきているのかというあたりはわからないと思うものですから、そちらの方も進めていって、どこか10月、11月ぐらいの時点では合わせてみたいなという部分もあるのです。

その上で、だから予算のところぎりぎり何とか続けていけるものはそのままいいですし、また何か盛り込めるのかなという検討するのも若干ですけれども、そのぐらいの時間はあるのかなというふうに。

確実にそれは予算化されるということではなくて、そちらの方に目を向けなければいけないのだという部分を担当課の方に納得してもらいたいというのか、そういうようなこともやっていけたらなと思うのですが、何分今ご指摘のように、時間的にはかなり短い期間ですから、もしその時点で予算化ができなかったらまた次の年ということになりますが、ただ一気に本当にできることではないので、例えばですけれども、時間的にもこの年は先ほどどこに重点を置くのかというお話でしたけれども、あとだから一、二年はこのところを中心に、次の一、二年はここがというようなやり方もとれるのかなというような、事務局としても非常にまだまだどのぐらいの範囲を詰めていけるのかなというところで、これから少しずつご相談と思っているのですけれど。

野：まず、普通のプランですと、例えばここなどでは地域子育て支援センターの充実とかと漠然と書いているわけですね。それはいつまでどこをやるのという部分がないのですよ。普通の具体的なプランですと、行動計画というのが伴ってくるのですね。この部分というのは、男女共同というのは行政全般に意識としてじわっと浸透させるという、その共通的な事業というのがありますので、非常に難しいのですよ、とらえ方が。

ただ、今回見直しのプランに当たって、この今上げている項目について、これまでどのような事業を具体的にされてきたのかということをきちっともう一回精査した上で、それで進捗度合いを確認してもらって、見直しをしていかなければいけない部分は確かにあると思いますので、そこら辺は整理しているのですよね、今のところ。

それで、それを見ると大体どこがうまく進んでいて、どこが手がついていないかというのがわかってくると思いますので、そこら辺も含めて見直しのポイントにさせていただければなと思っています。

桜庭：そういう意味では、今後のスケジュールで5月と8月に、私たちのこの期の委員は2回委員会がございますので、その間に専門部会の作業が終わるときには、今部長の説明ございましたように、それぞれの施策の進捗状況、12年と15年度の委員の状況、時間差、この間にどれぐらい進んでいるのか、手がついていないのか、ついているのかを含めて、ちょうど今の状態がきちっと把握できますので、それを見た上でまたどうしてもここはもっと頑張るって早く進めろということを提言の中で、特に優先順位をつける事業ということで、文言にどんな形が盛り込んでいって、作業をこの委員会としてしていくという形が何がしかとれるのかなと思っています。

三崎：予算がなくても、この間のような授業を学校の中でやっていくというのは、教育委員会とかそういうところと連携したらやっていけるのではないのでしょうか。

桜庭：そうです。予算がなくても取り組めるというものもありますし、どうしても予算が必要、なければ何も動けないというものもあるわけですね。

ほかにございませんか。もうそろそろいい時間になってきましたが、何か意見ございませんか。

(なしの声)

桜庭：それでは、プランの見直し、今たくさんのご意見をいただきましてありがとうございます。プランを見直す部会のメンバーも皆さんも真剣に、作業に入る人たちもまた大変でしょうけれども、今いただいたご意見も、この中に生かすような形で検討してまいらなければならないなど、委員の一人としても今もう一回かみしめております。

それでは、ちょっと時間が早いかなという気がいたしますけれども、皆様のご意見が途切れてまいりましたので、プランの見直しに当たってのご意見を一応ここで閉じさせていただきます。

4. その他

桜庭：それでは、事務局さんの方で、その他で何かございましたらお願いいたします。

川村：事務局から。委員さん2名の方がこの会議でもって退任されるという方いらっしゃいますので、今校長会の方から大橋委員が出ていただいているのですが、4月の校長会で次の委員さんがまたかわるということをお聞きしているのです、挨拶、お願いいたします。

大橋：何か以前に来たときに、何で学校教育だというのが市役所からやりなさいなどとございまして、非常に混乱を、怒られました。アンケート結果が学校教育が一番男女平等が進んでいるというふうな意見もありました。

北海道の公務員というのは一番権利が進んでいると思いますけれども、それはさておきまして、今の教員の人事異動の時期で出ていく者は出ていきますし、やめるのもいますし、それから入ってくるのもいまして、今の校長会の役割分担に入るので、これからね。それで本当は男女共同参画の委員もその中の一つで、本当は膨大にあるのですけれども、それを1人にばかりがばっとやったり、そういうことができないのです。学校にも学校をやらなければいけないこともありますから。きっと共同参画の委員が別な者になるのではないかなと、そういう意味で言ったのですけれど、また大橋やれやと、こういうぐあいになるかもしれないのですけれども。

桜庭：ぜひともお願いいたします。

大橋：かわりましたら、もう今回で最後ですけれども、迷惑をかけましたけれども、いったん終わりの挨拶ということで。

桜庭：ありがとうございます。

川村：あと今日、村上委員の方来られてないのですが、この4月で職場復帰されるということで、今翔陽高校の方休職されていたのですが、増毛高校の方に行かれるということで、今日本当は出席して挨拶したかったそうなのですが、急遽ちょっと仕事の引き継ぎの方入りまして、出られなくなったということを申し添えておきます。

あと、紙谷委員の方が、今石狩市女性連絡協議会の方から推薦いただいて、来ていただいているのですが、この女性連絡協議会の方が3月いっぱい解散するというので、4月以降はこちらの女性連絡協議会の構成団体の一つであるポプラの会の方からの参加ということになりますので、よろしくお願いいたします。

続きまして、村上委員が退任ということで、公募の枠で来られていましたので、5月の広報で新しくまた公募をしてはいかがでしょうかという提案なのですが。

桜庭：事務局の方から、村上委員が増毛高校の方でお勤めになられるということで、おやめになるということで残念ですけれども、その交代という形で少し短い期間ですけれども、公募委員お願いした方がよろしいですね。

(はいの声)

桜庭：では、公募の方、皆様のご意見で、引き続き公募をお願いして、4月から入っていただくのですか、今度ね。

川村：5月の公募です。

桜 庭：5月公募。

川 村：はい。だから次の5月の第1回の推進委員会からになるかと思います。

桜 庭：お手数かけますけれど、お願いいたします。

何かありますか。最初の方のいろんな実績、計画、説明もございましたけれども、その質問でも、今気づいたことがおありでしたら、どうぞ。

ございますか、何か、三浦委員。よろしいですか。

(なしの声)

5. 閉 会

桜 庭：それでは、ちょっと早い終わりになるようでございますが、今回の15年度の第3回の委員会はこれで終わらせていただきます。

ご協力本当にありがとうございました。

川 村：次の会議は5月を予定しています。今日は決定いただきました見直し専門部会の委員さんはこの後今後の予定もありますので、ちょっとしばらく残っていただければと思います。

これで終了いたします。どうもありがとうございました。